

集落空間における空間構成上の特性 — 路地と敷地・住居の関連について その2 —

○日大生産工(院) 小柳 涼
日大生産工 宮崎 隆昌

1.はじめに

漁業集落では、徒歩行動を主とした人間的尺度で集落空間が形成されている。(その1)では、集落の路地空間が形成している外部空間がどのように構成され、どのように利用されているかを、「路地」「敷地」「住居」の関係性によって空間的特性を検討している。本稿(その2)では、本島における漁業集落において同様に分析し、比較している。

本研究で述べる「道」は役割に応じて次のように分類する。

「道路」:自動車を中心とした道(公)。

「路地」:徒歩を中心とした人間的尺度で形成される道(公私)。

「世古道(細路地)」:数軒の住居単位のためのアプローチに供する道(私)。

集落における路地は、地形によって限定される傾向が強く、地区が持つ自然地形の形跡を読み取ることができよう。生産面での主な機能は、人や物の移動を処理する空間である。生活面では、住と滞留と移動の一部が展開される。路地に近隣集団のコミュニケーションが表出し、コミュニティを形成する空間となる。本研究は、公の外部空間である路地と私の外部空間の一つである物干台の関係、路地空間と家屋の関係性としてアプローチ距離を算出することで、集落空間の構成を抽出し、離島集落と沿海集落を比較することを目的とし、高密度居住の仕組みを探求し、計画手法の基礎資料としてまとめた。

2.研究対象集落

三重県鳥羽市答志島(答志・和具・桃取)・菅島の離島と三重県度会郡南島町阿曾浦・南勢町相賀浦の沿海集落を研究対象地としている(fig.1)。

対象地は、生活と生産の場が一体化し混在している複合空間であり、建築単体同士が周辺環境と相互的なつながりを持ち、限られた領域内で高密度集住体を形成している。

答志島:三重県の鳥羽港の北東約1.4kmに位置し、北東部に答志町答志・答志町和具、南西部に桃取町があり、県道で結ばれている。

・**答志地区**:人口・世帯数共に3地区の中で最も多い純漁村の集落である。漁業従事者が50%を占め、漁港を中心として、漁港施設・公共施設・住居が不可分な関係を保っている。

・**和具地区**:答志地区に隣接している。3地区の中で最も規模の小さい集落である。山側に畑を所有する世帯もあり、主漁従農村の集落といえる。



fig.1 研究対象集落

・**桃取地区**:答志島の南西部にあり、人口・世帯数共に答志より少なく、主農従漁村の集落である。

菅島:鳥羽港の東約0.8kmに位置し、標高237mの大山を中心とした東西に長い島で、山地が大半を占め、家屋は島の北側1か所に集中している。漁業就業者が約43%、旅館などの観光業が約40%となっている。

相賀浦:南勢町の南端に位置し、磯浦、南島町阿曾浦に隣接している。人口965人、332世帯、産業としては、一本釣り、延網の水揚げ高が南勢町で一番多い地区となっている。

阿曾浦:鰐湾に面した東側の半島中央部に位置し、砂洲や海崖で形成されていたため、以前は険しい陸路しかなく、渡船が主な交通手段となっていたため環境条件は離島と類似している集落である。

3.調査方法

調査は、住居に対して、屋根伏せ・物干台の位置・屋敷地の家屋配置・敷地・家屋寸法・外構の測定・アプローチ・玄関戸から路地までの距離・エントランス・路地にあたる日差しの具合(7時~8時、12時~13時の1日2回)・行為観測(7時~8時、12時~13時、17時~18時の1日3回)を集落の中心部において観測調査を行った。

4.道の構成(fig.2・fig.3)

道を中心に漁業集落を捉えることは、集落全体から住居レベルまでを分析・考察するのに有効であると考えた。

○**答志**(格子状):磯・浜から背後の山へ向かい道が通り、これに直行して各住居へのアプローチの

The characteristics on the spatial composition in colony space

— The relationship between the alley, the site and the dwelling part2 —

Ryo KOYANAGI and Takamasa MIYAZAKI



答志



菅島



和具



相賀浦



桃取



阿曾浦

fig.2 屋根伏せ・物干台・エントランスの位置①

為の路地が自然地形に沿って形づけられている。全体的に、格子状に広がる道の構成をしている。
○和具(細目状): 漁港と裏浜の間に住戸群が位置している。漁港から裏浜までの路地は、基本的には漁港側の海岸線と垂直に延びているが、両側の海(東西)と南側の山の影響で、複雑な細目状になっている。

○桃取(格子状): 二つの湾が求心力を持つように形成され、この二つの湾を結ぶように主要な路地が延びている。これを中心に不定形な格子状に路地が形成されている。

○菅島(枝状): 漁港から集落の中央の山を挟むように、2本の主要な道が走り、その道から枝分かれして路地・世古道を構成し、家屋が配列されている。

○相賀浦(枝状): 西側の山から東側の海へ川が流れ、これに沿って主要な道が形成されている。この道から枝状に路地や世古道が延び、平行するように家屋が配置されている。

○阿曾浦(同心円状): 東側の舟溜まりを中心として

fig.3 屋根伏せ・物干台・エントランスの位置②

同心円状に路地が広がる。西側に浜があり、その間を南北に走る公道が沿岸域の背後地域へとつながっている。

5.分析、検討事項

1)屋外

各住居に「外流し」があることや生活の表出により、屋外空間では家事等を通じて近隣住民と交流を行っている様子が多くみられる。また、漁業集落で生活する人は、漁業を生業とする人が多く、生活時間帯がほぼ同様であり、日常的な交流を助長している。特に物干台は、路地空間と直接、接することのできる個々の家屋が持つ外部空間のひとつである。この個人の外部空間と公の外部空間である路地空間の関係性を分析する。

2)物干台の位置

物干台を敷地内における路地と接することができる家事作業空間のひとつとして取り上げ、その位置を把握することにより、路地との関係性を検討する(fig.4)。

○答志:物干台のない割合が高い。敷地に余裕がな

いため、物干台を設置できない場合は、家の前にひもを張り、路地にあふれ出して乾す住戸が数多く見受けられた。

○和具：答志・桃取と違い、物干台は様々な位置に配置されている。これは、和具の入り組んだ細目状の路地により、様々な敷地パターンができるためだと考えられる。

○桃取：物干台のない割合が最も高い。桃取は不定形なグリッド状の道を形成しているため、空隙が生まれ、そこに洗濯物を乾す場となる場合が多い。洗濯物を乾す目的での定められた物干台ではなく、ここでは自由に乾せるようになっている。

○菅島：物干台が路地に面して設置される割合が最も高い。菅島は、答志・和具であふれ出している物、全てを敷地の前面にまとめており、その上に物干台が配置されている。

○相賀浦：家屋が南北に向いているため、エントランスの位置が南、もしくは北からアプローチする形態が多くなっている。よって南に面して物干台を配置するのが一般的であるため、正面に存在する数値が集中すると考えられる。

○阿曾浦：物干台が家屋の裏側に配置される割合が最も高い。これは路地の構成上、北側にエントランス、南側に物干台を配置するパターンが出来るため、全集落で最も高い値を示していると考えられる。

3) アプローチ距離の計測

路地と敷地の境界(門や段差など区切られた部分)から玄関戸の中心までの人が普段、歩く最短距離をアプローチ距離とする。歩行者と家屋内にいる人との交流を誘発する可能性を持つ路地と住居の関係を評価する指標とし、アプローチ距離を計測する。

4) 日差しのあたり方の計測

路地に影響する自然環境において、欠かすことのできない光や日照がどのようにあたり、集落の人々にどのような影響を与えているかを分析する。

5) 路地と家屋の関係

各集落のアプローチ距離を計測した結果を(fig.5)に示す。

○答志：いくつかの4,001mm以上の例外はあるが、ほぼ0～2,000mmの範囲に集まる。平均1,178mmであることから、路地から家屋へのアプローチが最も短いことがわかる。これは敷地いっばいに家屋が建っているため、アプローチ距離を短くなっている。エントランスを高くするなどの工夫で路地を歩く人との関を形成している。

○和具：0～2,000mmの範囲、2,001～4,000mmの範囲に集まっている。和具は、答志に比べ、広い敷地をもつ家が多く、敷地の前や後ろに庭を設けることができ、路地と家屋との間に緩衝帯を持つことにより、アプローチ距離が長くなっていると考えられる。平均2,069mmである。

○桃取：0～2,000mmが30.5%、2,001～4,000mmが22%、4,001～6,000が23.9%、6,001以上が17.1%と6集落の中で、最も分散している。これは、道の形状により様々な敷地パターンが考えられるためだと推測できる。

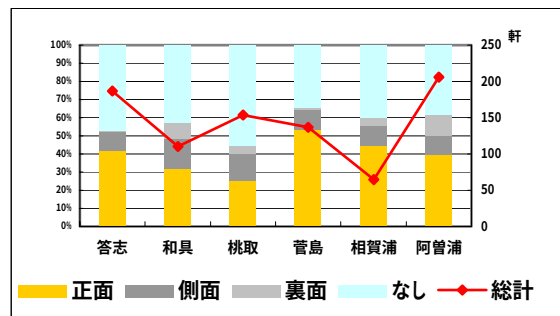


fig.4 物干台の位置

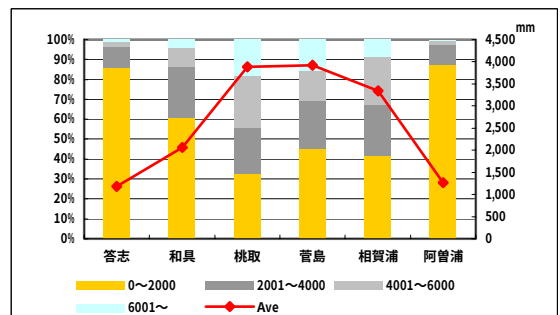


fig.5 アプローチ距離とその平均値

○菅島：家屋の前に風呂やトイレ、洗濯機などを玄関の両脇に配置し、中央からアプローチするという家屋の構成により、アプローチ距離が長くなっていると考えられる。現在はこのような構成をしているが、以前は風呂や物干台がなく、プライバシーを保持出来なかったと考えられる。生活の変化、生業の変化等により、このような構成が発生したと推測できる。平均3,916mmと6集落で最も長い値となっている。

○相賀浦：方位を重んじ、エントランスを南側に設けることから、路地から直線的に家屋へ入る形や迂回する形によって、分散していると考えられる。よって平均値が3,345mと長くなっている。

○阿曾浦：答志と同様に、ほぼ0～2,000mmの範囲に集まっているが、路地の構成が同心円状に広がることにより、エントランスが向かい合わせにならず、段差などはあまり見受けられなかった。

6) 路地に対する日差しのあたり方

全集落とも、同様の日差しのあたり方をしていた(fig.6)。漁業集落での生活は、起床・就寝時刻が早い生活である。この生活時間帯、生活様式に合った日差しのあたりをしていた。朝、夕と作業をしている時間帯は、路地にあたる日差しは制限され、物干台の部分に日差しがあたっていた。

7) 行為観測

路地における行為を1.移動、2.滞留、3.水遣りなど(個人の趣味)、4.漁業に関する作業、5.立ち話(2人以上の行為)の5つに分類し、プロットした。全集落で共通しているのは、海に近づくにつれて全ての行為が多くなる(fig.7)。これは、離島であるため、船での移動は欠かすことが出来ないことや漁業に行く人、船に漁具を取りに行く人、次の漁の準備をする人など様々な人が集まってくるた

めでもある。さらに、全集落とも海岸線付近には広いスペースがあるため、様々な行為が発生するという要因が考えられる。

路地における行為は、生活時間帯が同じことにより、外流しでの家事行為が行われている場で多く発生している。

6.まとめ

1)物干台の位置に関して

高密度居住において、物干台を設けるスペースがない世帯が全集落で、43%程度存在する。これは、敷地の形状により必要としない場合と設けるスペースがない場合との2つが考えられる。

物干台がある場合は、エントランスの位置や周辺環境、方位、自然環境、敷地の形状により位置が決定される。6 集落における物干台の位置の差異は、路地や周辺環境との関係を持つ場となる場合と閾装置としての役割によって表れている。

2)アプローチ距離について

答志・和具では敷地が狭く、アプローチ距離を長く取ることができない。答志において、路地が格子状であるため、アプローチ距離が短いと考察でき、和具においては路地が迷路状であるため、住戸間に空地ができやすく、答志よりも長い値を示している。阿曾浦も同様に、平均 1,270m と短い。

路地の形状に差異はあるが、平均は近似値であることは、狭隘な集落において段差、エントランスの位置などの工夫により、内部空間と路地空間の関係を保っていると考えられる。

それに対し桃取・菅島・相賀浦は、答志・和具・阿曾浦に比べ敷地に奥行きがあるため、アプローチ距離を長くすることで、公と私との距離を保っている（スペーシング）。菅島においては、路地沿いに風呂やトイレ、洗濯機などを配置することから、アプローチ距離の平均が 3,916mm になっている。答志・和具・阿曾浦はアプローチ距離が短いため、路地へあふれ出して作業すること多くなり、交流を誘発していたが、桃取・菅島・相賀浦は玄関と路地の間、つまり敷地内での作業ができるため、路地でのあまり交流がみられなかった(fig.8)。

3)路地に対する日差しのあたり方に関して

高密度集住内における自己規制により、家屋の高さを制限することから、日差しのあたり方(fig.6)や風通し等を実現していると考えられる。

4)離島と本島の差異について

地形による道の構成、敷地パターンの違いはあるが、相賀浦、阿曾浦は陸の孤島のような集落であることから離島と相似関係にあると言える。

以上より、下に得られた知見をまとめる。

- ① 高密度集住の自己規制
- ② 相互扶助機能が働く(防災・利便・快適)。
- ③ 公と私の狭間に閾空間を設ける事により高密度集住を可能にしている。
- ④ 閾の道、日差しの隙間に住空間機能を保持している。
- ⑤ 高密度集住空間における通風の確保を考えた家屋配置をしている。



fig.6 路地にあたる光の変化(菅島)



fig.7 行為観測(菅島)

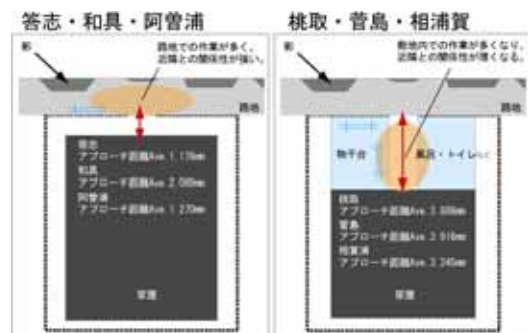


fig.8 空間利用

7.今後の課題

本稿では、路地を歩行する人または家屋内にいる人に影響を及ぼす外部空間の媒体に関することを検討した。今後は、外部空間と内部空間の関係性、日差しのあたり方と物干台の位置、路地で起こる行為の関連性やそれらの行為を阻害する要素について探求することが課題である。

参考文献

- 1) 金栄爽・高橋鷹志：密集住宅地の「住戸群」における路地と隙間の役割に関する研究,日本建築学会計画系論文集 No.469, pp87-96,1995.3
- 2) 長坂大：集落における屋外空間の構成と変遷についての研究,日本建築学会計画系論文集 No.495,pp271-279,1997.5
- 3) 寺内美紀子・坂本一成・奥山信一：建築の外部空間の分節と配置形式,日本建築学会計画系論文集 No.491,pp91-98,1997.1
- 4) 山本健司・宮崎隆昌：離島集落における空間構成上の特性と個と集団の「距離感覚」の関係性,日本建築学会計画系論文集 NO.583,pp 9,2004.9
- 5) 鈴木成文：「いえ」と「まち」,鹿島出版会,1983